

第1章 前書き

何故生徒は学校に武器を持ち込み、説明できる何の理由もなしに仲間の生徒や教師に発砲しようとするのだろうか。発砲する生徒は怒っているのか。狂っているのか。その動機は復讐なのか。犠牲者に対する嫌悪感からか。注意を自分に惹きつけたいからか。

人間の暴力の起源は複雑である。思索家、歴史家、そして科学者はこの問題を何世紀にもわたって探索してきたが、その回答は捕らえどころがない。暴力行為の根元は多元的かつ複雑で錯綜している。個人と環境が違えば暴力の要素も異なる。暴力は、それが発生した後はその理由を追跡することですら困難である。脅威を評価し脅威の発生を阻止することは更に困難で挑戦的である。

この論文は脅威の評価とその阻止に関する体系的な手順を提示しようとするものである。そのモデルは教育者、精神衛生専門家、並びに法律執行部局が使用できるように設計している。

全米暴力分析センター（NCAVC）がこの論文の主題を取り上げる契機となった同じ校内暴力事件が、全米の学校管理者及び法執行部門関係者が校内暴力の脅威ないしは行動に対処するためのそれぞれの方針と手順を検討し作成する契機ともなったのである。

この論文で取り上げるモデルは、上述の各分野における努力の結果をより一層向上し強化するのに役立つことを期待して作成した。このモデルの基礎的な構造ブロックは第2章で概括的に説明する「脅威評価規準」（threat assessment standards）であって、口頭、文書、あるいは象徴的に表現された脅威を評価するための枠組みとなるものである。また、第3章で説明する四側面式評価手順（four-pronged assessment approach）も構造ブロックの一つで、これは脅威者を評価し脅威が実行される危険度を評価するための論理的・方法的手順を提供するものである。

このモデルは発砲する生徒の”横顔”を示すものではなく、殺人的暴力を学校に持ち込む生徒を指摘するような危険信号のチェックリストでもない。そのようなものは存在しない。どこかの学校で実際に発砲事件が発生する危険性は非常に低い、暴力の脅威はどの学校においても潜在的な問題である。脅威がいったん発生すれば、脅威を公平且つ合理的に評価できる標準化された手順を持っていることが極めて重要である。

全米暴力分析センターの研究とリーズバークでのシンポジウム

この論文は、FBI 全米暴力分析センターの約 25 年にわたる脅威の評価の経験から編み

出された概念と原則、及び学校での発砲事件に関して 1999 年に開催された全米暴力分析センターのシンポジウムで発表された諸見解、並びに 18 件の学校発砲事件に関する深層的考察を元にして作成された。

1998 年 5 月、全米暴力分析センターは、行動科学的に見た校内発砲事件の分析を開始した。最初の分析はある特定の校内発砲事件あるいは発砲失敗事件を分析し理解を深めようとするものであった。分析対象は事件そのもの、発砲生徒、彼の背景及び彼の学校、そしてその犯罪に影響を及ぼしたかもしれない社会的ダイナミクスが取り上げられた。最終的には 18 件の発砲事件がこの分析に取り上げられた。(この論文では問題の機密保持の必要性から、学校名を明らかにしていない)

1999 年 4 月にコロラド州リトルトンにあるコロンバイン高校で発生した発砲事件は全米を震撼し、FBI に対して新たな調査を求める誘因となった。ジャネット・レノ法務長官とルイス・J・フリーFBI 長官の支援の下、全米暴力分析センターは総数 160 名に及ぶ教育者、学校管理者、精神科医、法執行官、並びに検事を「学校発砲事件と脅威評価に関するシンポジウム」に招いた。そのシンポジウムは、1997 年 7 月、バージニア州リーズバーグで開催された。シンポジウムの出席者は全米暴力分析センターの分析に取り上げられた 18 校の教師、学校管理者（そのなかには発砲生徒又は自称発砲生徒を個人的によく知っている教師も含まれていた）、全米暴力分析センタースタッフ、並びに各発砲事件に係わった法執行官が出席した。更に青少年暴力、精神医学、自殺学、社会ダイナミクス、家庭ダイナミクスの各分野専門家も出席した。

校内発砲事件と脅威の評価

一般的に言って、青少年犯罪は 1993 年以降減少してきている。殺人事件は特に減少している。しかしこの希望的な傾向は、全米暴力分析センターで分析されたような形態の発砲事件に対する全国的な不安の波によって多少ともぼやけてきている。この種の青少年暴力は実のところ最近では極めて稀にしか発生していない。しかしながら、何ら理解できる理由もなく授業時間中に発生した突然で無意味なティーンエイジャーや教師の死は、学校で毎週発生しているその他の暴力行為に比べると遙かにショッキングで関心を引きつけている。

全国的メディアが照らすスポットライトの下で、コロンバイン高校発砲事件のような悲劇は、全米の隅々にまで恐怖やショックと心配をまき散らしている。教育者、精神科医、立法者、法執行官、両親、生徒、その他の人々全てが焦燥と不安にかられ、今後同種事件の発生を予防するために何らかの迅速な処置が必要と考えている。

その気持ちは理解できるのだが、そのような衝動に駆られてしまうとコミュニティ全体が H.L.Menken の警句にのべられた英知を忘れてしまう。「どのような問題でも、簡単ですっきりとした、しかし”間違った”解決がある」

足が引きつったときのようにコミュニティ全体が弾力性を失い、暴力の予防や対策手段

として杓子定規な方針に依存しようとする。

暴力に対する対策の一つとして、発砲する生徒に共通な「横顔」を求めて次の発砲者を識別しようとする動きが出てくるかもしれない。これは一見もつともな予防手段に見えるだろう。しかし実のところ、発砲の可能性のある生徒を検出するための注意信号のカタログやチェックリストを作ろうとする試みは近視眼的であり、危険ですらある。

メディアが発表したこのようなリストは、暴力に無関係な多くの生徒を、危険な又は殺人的傾向のある生徒として不当にレッテルを貼る結果に終わりがねない。事実、将来とも暴力行為を犯すとは考えられない多くの青少年が、この種リストによれば犯罪的行為又は性向を若干とも有すると区分されるかもしれないのだ。

校内発砲事件の後、校内での厳格なセキュリティ上の予防措置、あるいは学校暴力を目標にしたより厳しい法律制定などを緊急対策にしようとする要求がしばしば聞かれる。だがこれらの要求が、校内発砲事件の根元を理解しようとする組織的・共同的な努力とともに提起されたことは殆どない。

一体どんな理由である生徒は、自分の悩みや感情のはげ口に対する何らかの回答として、同輩や教師に発砲したいという気持ちになるのだろうか。その生徒の感情の起伏の中で、彼を殺人者として予測するための性向カタログに出てくるような信号ではなく、彼が助けを求めていること示す信号はなかったのであろうか。彼に家族、友人、コミュニティはどんな影響を与えたのであろうか。

教育者、法執行部局、その他一般公衆が直面している問題はいかに学校暴力を予言するかということではない。何らかの暴力を確かに予言することは極めて困難である。過去に暴力的行為に走ったことのない人物が将来暴力をふるうだろうと予言することは更に困難である。校内発砲事件のような極めて稀にしか発生しない行為を予測することはほとんど不可能である。

これは単純な統計的論理である。すなわち、何らかの暴力事件発生の可能性が非常に低い状態の中で多数の人が識別可能な危険要素を持っている場合、その大勢の人の中から実際に暴力行為に走る数少ない人を選別できる確かな方法はないのだ。

暴力事件の発生後にその犯人の過去を追跡して、後から考えるとそれが危険の兆候であったかもしれないと思われる手がかりを探ることで、重要で役に立つ情報を入手できるかもしれない。しかし、過去の事件を解釈するのに役立つ有効な手がかりが、将来、類似の事件が発生する場合の予言者になるとは考えるべきではない。今のところ多くの生徒の中から、発砲事件に関わる生徒を確実に区別できる性向や特長などは存在していない。それどころか、発砲事件に関係した青年と同じような性向と特長を持つ生徒は、実は、数多くいるのである。

校内発砲事件についての誤った情報

校内発砲事件はニュース・メディアによって広範囲に報道されているが、そのニュース報道から得られる情報は必ずしも完全でなく、正確であるともバランスがとれているともいい難い。ニュース報道は本来せつかけであり、不完全で不確かな情報源に基づいて作られることがしばしばである。ジャーナリストは、通常、警察やその他捜査機関が作成した校内発砲事件やその背景情報、発砲事件に関わった生徒の以前の行動や彼の性向などに関する重要な機密情報に接することはできないのだ。

学界や研究者、あるいはその他の専門家が発表する専門的な出版物がニュース記事や公開出版物に基づいて作成されている限りにおいて、その内容については多少の留保条件の下に読む必要がある。それというのも、その内容には学校又は法執行部局の記録によってのみ入手可能な重要・正確な情報に欠けているからだ。

ニュースは、よく知れ渡ってはいるが間違った又は実証されていない校内発砲事件の印象を誇張して報道する。それらの印象とは：

- ・校内暴力は伝染病である。
- ・校内発砲者はどれも似た性格を持っている。
- ・校内発砲者は常にひとりぼっちである。
- ・校内発砲の動機は例外なく復讐である。
- ・武器を入手しやすい環境が最も重要な危険要素である。
- ・異常で常軌を逸した行動、関心、趣味などが、暴力的に向かう生徒の刻印である。

校内発砲や他の校内暴力は単に学校や法執行部局の問題であるにとどまらない。暴力は常に学校、家庭やコミュニティと深く関わっている。

青少年はそれぞれに、家庭、学校、仲間、コミュニティ並びに教養によって形作られた前向き又は後ろ向きの全人生経験を抱いて学校に来る。それらの全人生経験から、彼の価値観、偏見、性癖、情緒、並びに彼の訓練、ストレスや権威に対する反応が生まれてくる。彼の学校内での行動は彼が受けた経験や影響の全てに感化される。

どの要素も決定的なものではない。しかし同じ論法で、影響を及ぼさない要素は一つもない。というのも、ある生徒が暴力的行動の可能性の兆候を示したとき、その危険の可能性が現実とならないように、学校や他の機関は指導・介入する能力——及び責任——を有するのだ。